



道徳科の授業づくり

◆ 教科書等の読み物教材を用いた授業づくりのポイントは、二つあると考えています。一つは、道徳科の特質を生かした学習の時間確保、もう一つは、国語科の「読むこと」に関する学習をできるだけ控えることです。

◆ 道徳科の特質を生かした学習とは、授業のねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める学習です。

具体的には、授業の「展開」の後半又は「終末」に設定する、教材を通して学んだことを基に、教材から離れて「自分を見つめる」学習です。

◆ この段階で子供たちは、書くことを通して自己内対話を重ねます。10分程度時間を確保したいところですが、それがかなわない要因には、「展開」の前半で登場人物の行動や心情について読み取る、いわば国語科の学習に時間を費やしてしまうことがあります。

◆ 道徳科の授業づくりでは逆転の発想を用いて、まずは「自分を見つめる発問」を考え、それに要する学習時間を確保した上で、授業のねらい達成につながる「中心発問」と、それを生かす「基本発問」を設定する。その際、「基本発問」の数は極力精査する必要があります。

※「はむらの道徳科授業指針」教師の視点③「発問構成の工夫」…「源流」第53号参照



豊かな内面ときちんとした行いの両方を大事にする

しつ ぶん か すなわ や ぶん しつ か すなわ し
質、文に勝てば則ち野なり。文、質に勝てば則ち史なり。

ぶんしつひんびん しか のち くんし
文質彬彬として、然る後に君子なり。

(訳) 人が生まれながらにもっている実質的なものが、教養によって身に付けた文化的要素に勝っていると、粗野な感じになる。反対に文化的要素が実質的なものより勝っていると、まるで記録係の役人のように、表面ばかりを飾り立てることになる。実質と文化的要素の両面が見事に調和しているのが、君子の本来の姿である。

出典：「壁を乗り越える論語塾」安岡定子著（PHP研究所）